

## 特集

## 渋谷の福祉を考える⑥

## —相談支援 Part2—

障がいのある人の  
安心・安全な暮らしの実現に向けて

前回号では、相談支援事業の動き並びに渋谷区の現状と今後について、アンケート実施の結果とともにまとめました。今月号は、2018年4月24日に開催された、渋谷の福祉を考える有志の会（以下有志の会）主催の福祉サービス事業者向けセミナー“～どう変える？渋谷の福祉 ～どう活かす『計画相談』”の様子をお伝えしながら、相談支援についてより深めていきたいと思えます。

### 1. 今回のセミナー開催について

新しい渋谷区障害福祉計画の中の大きな課題として、相談支援体制を作ることが挙げられました。しかし、相談支援体制を整えるにはまだまだ課題はあり、障がいのある人や家族にとって、計画を立てることや相談事業所に相談するということが身近なものになっていない現状があります。また、既存のサービスをどう活用するか、相談支援事業所の役割、複数のサービスを使う場合の協働の仕方など未整理の部分が多くあるように思います。

今回のセミナーは、具体的な事例を用いて、下記2本立てで行なわれました。

- ① 計画相談の役割とそれを活かすネットワークを考えるパネルディスカッション
- ② 現場で活かせる利用者のアセスメント（本人の持つ力の確認と支援の方向性）と課題解決に向けた事例検討の方法

### 2. セミナーの様子

今回のセミナーでは、実際にあった事例

計画相談の役割とは何か、それを活かすためのネットワークはどう構築されたのか、相談支援体制がどのように作られていったのか、事例検討から紐解いていきます。そこから見えたものは…

をもとに、有志の会浦野耕司さん（NPO 法人渋谷なかよしぐるーぷ）の進行のもと、パネラーの松田福貴さん（はあとびあ相談ステーション 相談支援専門員）、古戸勉さん（NPO 法人絆の会 福祉作業所ふれんど所長）、菅原睦子（認定 NPO 法人ぱれっと えびす・ぱれっとホーム施設長）によるディスカッションが行なわれました。渋谷区障害者福祉課職員をはじめ、福祉サービス事業所の方々約50名参加されました。

前半のディスカッションでは「野中式」と言われる事例検討の方法を用いて、ディスカッションと同時進行する形で、ホワイトボードに内容を整理しながら書き込んでいきました。事例の概要、関係者や関係諸機関との繋がり、本人の情報や周りの状況、困り事等、ディスカッションが終了した時点で、実に白板5枚分にもわたりました。後半は、武田牧子さん（プラナーナ新宿相談支援 相談支援専門員）を中心に、野中式の方法やポイントについて参加者と共に共有しました。



【前半のディスカッションの様子】

### ＜ディスカッションの様子＞

今回の事例提供者は、一昨年にグループホームへの入居が決まり、就労継続支援 B 型作業所に通う 30 代の A さんです。まず、入居以前の A さんについて、作業所の所長より語られました。A さんは高校卒業後から約 20 年間、同じ作業所に通っているが、年間の半分位しか通えていなかったこと、お母様に対する反抗、ADL(※1)の問題もありグループホーム入居は難しいのではないかと周りの方達が思っていたことなど、今の快活な A さんのイメージからはずいぶんとかけ離れた印象の内容でした。

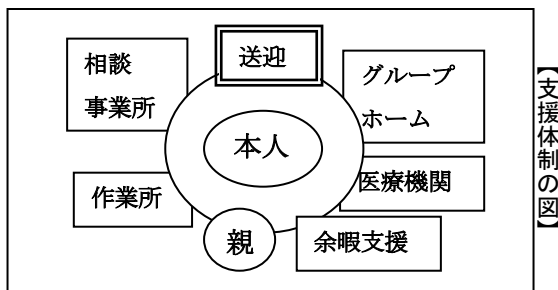
そんな A さんですが、ホームへの入居が決まると、それを前向きに捉え始め、入居日を心待ちにしていました。しかし、入居決定から程なく病気が発覚した A さんは、大きな手術をすることになり、体調面での心配という新たな問題も出て来ました。関係者全員が『この先どうなってしまうのだろう』『グループホームの入居はやはり無理なのではないか』と思いました。先に入居していたホームの仲間たちからも、A さんに対する心配と励ましの言葉が聞こえ始めた頃、手術は終わり、術後も良好で、数か月後にホームに入居することができました。関係者全員が心配していた A さんですが、いざ入居してみると、自立心が強く、かなりのことが一人でできていました。また、協調性があり、ホームの他の入居者とも良好な関係を築いていました。

次に出てきたのは、入居前から上がっていた移動支援の問題でした。A さんは月曜から金曜まで、ホームから作業所へ通所していますが、渋谷区の端から端までの移動にはバスを乗り継ぐ必要があります。制度上、通勤に移動支援が使えないという制限

があるため、入居からの数か月はお母様による送迎と、実費によるヘルパー事業所の送迎を利用していましたが、ヘルパー事業所からの請求額はかなりの高額になってしまいました。そこで何か別の方法は無いものかと、またここで担当者間での話し合いが行なわれ、様々な方の協力を得て、送迎の体制が作られました。具体的には社協の相互サポート、作業所スタッフ、ボランティア、母親が分担して送迎をすることになりました。ホームでの生活に慣れ、一人で起きられる日も増えてきました。また A さんの作業所への通所率は約 2 倍に増え、しっかりと作業できている日が増えてきました。

このように A さんの変化は目覚ましく、送迎についての課題は残るものの、私たちはこの事例から学ぶところは大きいです。  
＜A さんを取り巻く支援体制＞

もともとサービス事業所の職員同士が知り合いだったということもあり、自然に役割分担ができていたことで情報共有がスムーズに行なわれました。また、本人やお母様のニーズが明確で、そこから目標を設定し、数回にわたって支援者による担当者会議を行なうことができました。必要に応じて本人を含めた会議を行なうことで、新しいチャレンジが可能になっていきました。



A さん本人について、複数の目で見守ることで、いろんな場面や角度からの視点で捉えられ、実現可能な目標設定に繋がった

※1 ADL(Activities of Daily Living): 食事や着替え、排泄や入浴など、人間が日常生活を送る上で

のではないのでしょうか。Aさんに潜在している能力（生きる力やできる力）を引きだして支援していくことで、新たな可能性が生まれました。

福祉に関わる私たちにとって、良い人間関係を築くことは非常に大切な事だと改めて考えさせられました。

今後も支援者同士の連携を深め、気軽に事例検討会を開き、関わっていく方の将来に役立て、支援の輪をどんどん広げて行きたいと思いました。

<参加者の声>

「他事業所との連携の重要性を改めて学びました。積極的に情報、本人の状況を共有し、よい支援をするためのチームづくりを意識していきたいと思います」

「とても勉強になりました。話を聞いて、自分の事業所は連携が取れているのかなど不安になってしまいました。今日のセミナーは、これからの自分に新しい視点を見つけてくれたと思い、感謝しています」

「情報の共有化、見える化、大切だと思いました。言葉だけだと伝わり方、受け取り方が違うということもあります。本人も交えて関係者が顔を合わせ、情報を共有し支援していきたいと思います」

「本人、家族の生活向上、QOL(※2)アップのために支援計画が必要であることも理解できました」

「ただ話し合うだけでなく、書き出すことによっていろんなことが整理されていくことのすごさに改めて気づかされました」

「他のスタッフにも聞いてほしい内容でした」

### 3. まとめ

事例検討を活用することで次のような利点を得られました。

- ・支援の方向性が見えてくる
- ・なぜこの支援が必要なのか、背景を知り共有できる→自分の役割が分かる
- ・楽しい事例検討をする中で、アイデアが生まれてくる
- ・同じチームの中でも違う意見や、捉え方が違うことがある
- ・その人の強みを見つける  
→「良いところ探し」をしよう

その中で、改めて本人を中心とした事業所間の連携や情報共有の在り方について考えさせられました。

普段から支援者同士が顔を合わせて話をする機会を作ることで、「顔の見える連携」となり、小さな事柄でも連絡を取りあえるようになります。また、各々が持っている情報を口頭で伝えるだけでなく、今回の事例検討会のように情報を全て書き出し「見える化」する事により、正しく情報共有ができ課題が分かりやすくなり、新たな手立てを見出す事にも繋がります。そして、事業所間の連携と同時に、各事業所内における「チーム作り」も大きな役割があることが分かりました。職員同士が同じ方向を向くことにより、よりよい支援に繋がるのだと思います。

本人やご家族のニーズはどこにあるのか、どういったアプローチが考えられるのか、課題解決に向けて、その方に関わる支援者・事業所が、それぞれにどのように関わるのかを考え、「チームでの支援」をより一層考えていかななくてはと強く感じました。一つひとつの日々の取り組みやそれぞれの想いが、本人の内なる力を引き出し、生活の質の向上に繋がるのだと思います。  
(えびす・ぱれっとホーム

佐々木真理・佐々木志保)

※2 QOL(Quality of Life)：物理的な豊かさやサービスの量、個々の身辺自立だけでなく、精神面 ⑤  
を含めた生活全体の豊かさと自己実現を含めた概念